

地域に密着した大学ボランティアセンターの活性化要素

—ボランティア学習のマネジメントとプログラムの試案作成に向けて—

齊藤 ゆか 神谷 明宏

はじめに

筆者らは、これまで、福祉教育・ボランティア学習の諸分野、特に日本の高等教育機関におけるボランティアへのサポート体制の現状や特徴を、評価項目¹に従って、その具体的支援方策を論及してきた(齊藤・神谷2006)。また、学生と地域を結ぶ意義を明らかにするため、「ボランティア活動論」の授業を素材として研究を続行している(神谷・齊藤2006, 齊藤2007)。筆者らが所属する本学人文学部生涯教育文化学科²においては、「体験活動」³を中核として学科編成を行っているために、「体験活動」の政策的な枠組みの構築や、学生への体系的な学習方法の開発が急務となっている。

ここでいう、体験活動とは、「参加者の共通した『体験』をもとに他の人々との意見交換(ディスカッション)を通じ、自分の考えや行動を参加者との関わり方を検討することによって、態度や行動の変容や人間的な成長へつなげていく」とするものである(廣瀬・澤田・林・小野2000:10)。

そこで、本研究は、高等教育機関での「体験活動」の一種ともいえる、ボランティア学習に限定し、「なぜ、高等教育でボランティア学習を行わなければならないのか」、「学生に相応しいボランティア学習プログラムとはどのようなものか」、「社会や地域ニーズに即した高等教育機関にはいかなる支援方策が必要か」の課題に接近しようとするものである。

本稿においては、高等教育における先進的な大学ボランティアセンターのうち、筆者らの問題意識に合致した「地域に密着した大学」に注目し、センターの組織形態や運営方針、ボランティア学習のマネジメントから、地域に密着した大学ボランティアセンターの活性化要素を引き出すこととする。また、学習段階に応じたボランティア学習プログラムの試案の作成を行い、今後の生涯学習の基盤を構築することを研究の目的とする。

尚、本稿では、前報(齊藤・神谷2006)で取り上げた先進

的な大学ボランティアセンター⁴の分類のうち、「地域に密着した大学」に焦点化したインタビュー資料を用いることとする。

1. 地域に密着した大学ボランティアセンターの先進事例

本節では、地域に密着していると考えられる大学ボランティアセンターを有するS大学、R大学、F大学の3校に限定し、ボランティア国際年の目的に沿って分析を試みる。国際年の目的とは、すなわち、①ボランティアに対する理解、②ボランティアへの参加が促進される環境整備、③ボランティアのネットワーク化、④ボランティアの促進(評価)である(社会福祉法人日本青年奉仕協会1998, 齊藤・伊藤2002)。

1-1. S大学地域交流センターの事例

地域交流センターを中核にネットワークを強化するS大学については、ボランティアの環境整備及びボランティアの理解を中心に検討していく。

(1) ボランティアの環境整備とネットワーク化

まず、S大学におけるボランティアの環境整備とネットワーク化については、下記5点の特徴を見出すことができる。

第1に、地域交流センターの設置についてである。S大学は、2002年度に短期大学介護福祉学科を開設して以来、地域の福祉課題について実践プロセスを通じた「地域密着型教育」を展開する基盤整備に努めてきた。その後、2004年9月に県内初の福祉系4年生大学の開設に併せ、「地域交流センター」を⁵設置したが、今日では本センターが地域福祉の中核を担っている。

第2に、地域交流センターの運営委員会の設置についてである。運営委員会は、学内教職員(「センター長(教員兼務)」及び「センター職員」)のみならず、学外からの有識者

及び、学生のボランティアスタッフを協働参画させ、核となる組織の形態化を図ってきた。また、運営委員会に加え、地域活動の支援者として、学内ボランティアサークルも重要な協力団体となっている。

第3に、地域交流センターの担当者についてである。S大学のセンター長は、社会福祉援助技術及びレクリエーションを専門とする、前職が県社会福祉協議会の中心的人物であった。そのため、各市町村社会福祉協議会を掌握し、図1のように、センターとボランティア活動推進団体、及び県内生涯学習関連のNPOを協力団体としてネットワークを結んできた。また、2006年度より、学内に専門の常勤ボランティアコーディネーターをおき、センター担当者の充実を図っている。

第4に、地域交流センターの拠点についてである。S大学は、開学以来、「キャンパスは地域全体」をキャッチフレーズに、常に地域に開かれた大学を志してきた。具体的には、地域住民に、福祉及びボランティア、レクリエーション等の情報や学習の支援のみならず、住民に活動の拠点として子ども遊びを提供することで、大学への評価を段階的に高めてきているようである。

最後に、地域交流センターの予算についてである。予算の詳細は明らかとなっていないが、センターの事業を予算

化することで、先駆的な事業を取り入れていた。

(2) ボランティアの理解と評価

次に、S大学におけるボランティアの理解と評価についてである。S大学では、表1のように、ボランティアへの理解と評価を高めるため、学科の専門科目「ボランティア論」、「レクリエーション援助法」以外に、学内外連携のボランティア関連講座の開設に力点を置いてきた。ここでは、2006年度前後を中心に、センターにおける開設講座の特徴ある点を中心に言及していきたい。

第1に、S大学では、短大の開設科目にて「レクリエーション・インストラクター」の資格が取得できると同時に、県内レクリエーション協会との共催により市民向けの資格講座も開設していること。第2に、レクリエーションの資格取得者には、「レクリエーション交流会」を結成し、継続的なフォローアップセミナーも実施していること。第3に、センターを「遊びの城」、「わんぱくあそび寺子屋」(文部科学省委託事業「地域子ども教室推進事業」)の会場とし、子ども遊びのプログラムを実施していること。第4に、センターでは、大学独自の地域活動支援プログラムを提供し、地域からの要請活動に応えることができる体制作りを整えていること。

以上を通じて、S大学においては、次の4点の目的が達

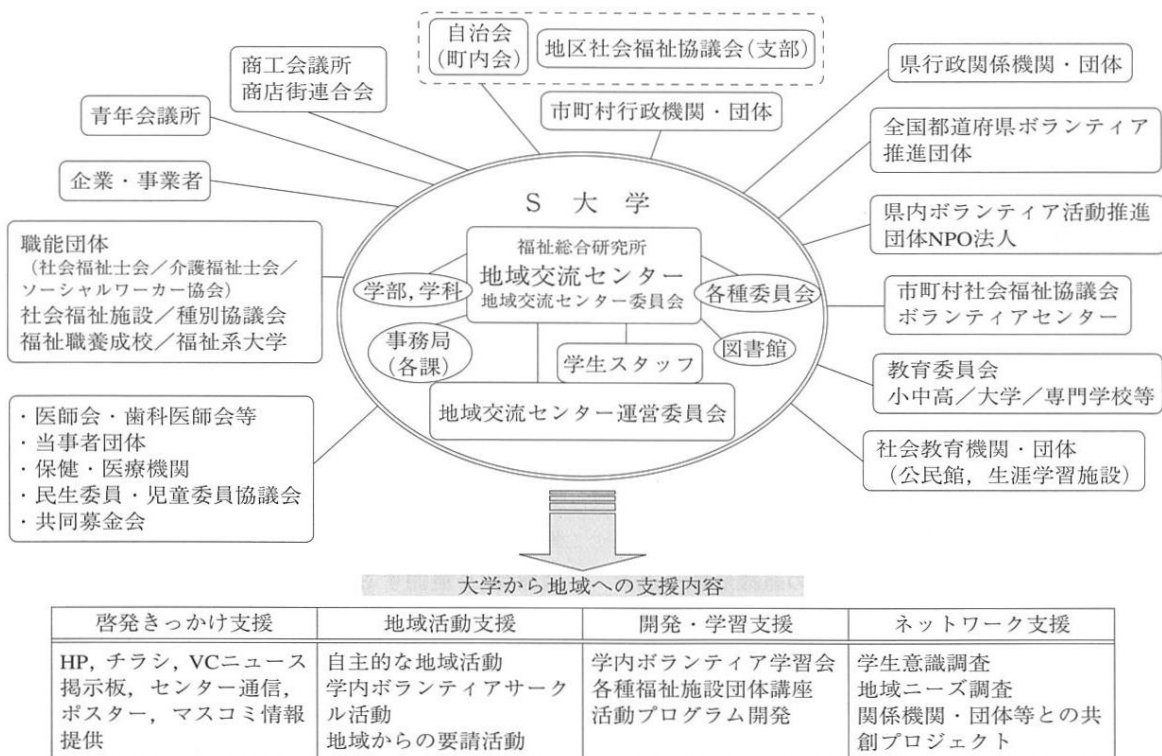


図1 S大学のボランティアセンター(地域交流センター)における地域ネットワークと支援内容

注：S大学における資料「S大学地域交流センターと地域の関係図」より筆者らが加筆。

表1 地域に密着した大学ボランティアセンターにおけるボランティア学習養成科目

位置	養成プログラム	科目名・プログラム名	開講	単位	履修・対象	曜日・時限	備考	
学内	社会福祉・専門科目	ボランティア論<学部>	通年	4	学部学生	—		
	介護福祉・専門科目	ボランティア論<短大>	前期	2	1年、学生	—	来年度より4単位へ	
	介護福祉・専門科目	レクリエーション活動援助法<短大>	通年	2	1年学生	—	レクリエーション・	
	介護福祉・専門科目	レクリエーション概論<短大>	前期	2	2年学生	—	インストラクターの	
	介護福祉・専門科目	レクリエーション・実習<短大>	通年	2	学生	—	資格取得単位	
S大学	レクリエーション・インストラクターの資格講座（共催：S県レクリエーション協会）	【理論】レクリエーションの基礎理論	前期	無・資格取得	市民及び学生	3月～9月の間、計13回	60分×3回	
		【理論】レクリエーションの支援理論	随時				60分×7回	
		【理論】レクリエーションの経営論	随時				60分×6回	
		【理論】レクリエーションのサービス論	随時				60分×5回	
		【実技】レクリエーションのホスピタリティ	随時				60分×4回	
		【実技】レクリエーションのアイスブレイキング	随時				60分×4.5回	
		【実技】レクリエーション必修	随時				60分×12回	
		【実技】レクリエーション選択	随時				60分×16回	
		【実技】レクリエーション支援実習	随時				60分×8回	
	フェスティバル	わんぱくあそびフェスティバル2006	随時	無	学生、親子	5月（日曜）	支援者：学生200名、外部協力者100名	
	フェスタ	WAZAフェスタ2006	随時	無	学生、親子	7月（日曜）		
	2006年度文部科学省委託「地域子ども教室推進事業」	わんぱくあそび寺子屋	通年	無	幼児、児童	8-2月・10-12時	2時間×45回、子どもの居場所づくり、市民及び学生が支援者	
	「遊びの城」2006年度文部科学省委託「地域子ども教室推進事業」	ニュースポーツ「ベタポート」「輪投げ」	夏季期間	無	学生、幼児・児童、保護者	8月・10-15時	5時間×1回	
		ニュースポーツ「ベタポート」				8月・10-12時	2時間×1回	
		チャレンジランニングゲーム1				8月・10-12時	2時間×1回	
チャレンジランニングゲーム2		8月・10-12時				2時間×1回		
セミナー	静岡から発信する「福祉文化」とはなにか		無	市民	9月・13-16時半	基調講演、6分科会		
大会	ねんりんぴっく2006静岡大会		無	市民	10月（土曜）			
講座	太極拳		無	市民	10月（日曜）			
R大学	教養教育特殊講座	地域参加活動入門	前期	2	学生	月曜・3時限		
	地域活性化ボランティア・プログラム	地域活性化ボランティア・事前学習Ⅰ	随時	2	1年以上、又は、3年以上の学生	時間割外	90分×4回	
		地域活性化ボランティア・事前学習Ⅱ	随時				90分×3回	
		ボランティア活動の実施	通年				実働40時間以上※	
		地域活性化ボランティア・事後学習	随時				90分×3回	
	学校外活動	ボランティアガイダンス	随時		—	時間割外	学生ボランティアが中心に実施	
		ボランティアサークル合同説明会	随時					
ボランティア入門講座「ホップ・ステップ・ボランティア」	事前学習：基礎講座、オリエンテーション	随時	無	学生	11月・10-16時半	大学ボランティアセンターが中心に実施		
	ボランティア活動の実施	随時			11-12月1回			
	事後学習：ボランティア報告会	随時			12月・10-12時半			
学内外連携	ボランティアコーディネーター養成（K市社会福祉協議会の協同学術協定による）	社会とボランティア	前期	10	全学部の学生、及び社会人が対象	月曜・6時限	1999年より発足、2006年現在、学生40名、社会人20名が学ぶ	
		ボランティア情報・調査演習	夏季			月曜・7時限		
		ボランティアインターシップ				時間割外		
		ボランティアマネージメント	後期			月曜・6時限		
		ボランティア活動支援演習				月曜・7時限		
試験・修了レポート	年末							
F大学	学内	ボランティア論	—	2	学生	—		
		基礎教養科目「ボランティア活動」	ボランティア活動1	通年	2	1-4年学生	時間割外	実働90時間以上
			ボランティア活動2		4	2-4年学生		実働180時間以上
			ボランティア活動3		6	2-4年学生		実働270時間以上

注1：資料は、S大学、R大学、F大学への聞き取り、内部資料及びパンフレットの一部分を加工し、著者らが作成。

注2：各大学で実施している大学カリキュラムに位置づけられ、単位取得が可能なボランティア学習の科目を灰色部分で示した。

成されたといえるであろう。①ボランティアの理解として、子どもの遊びが枯渇していた地域⁶に、多様な遊びが意図的に提供されたこと。②ボランティアの環境整備として、大学に子ども達が集まる空間（居場所づくり）と活動展開が可能となったこと。③ボランティアネットワーク化として、学内に市民が出入りすることで、学生と市民との相互交流

が自然に深まったこと。④ボランティアの促進・評価として、市民にも「レクリエーション・インストラクター」の資格取得が可能となった上、資格を生かす場として子ども遊びプログラムが実施され、地域活動の促進に役立っていること、である。

1-2. R大学ボランティアセンターの事例

R大学のボランティアセンター(地域交流センター)は、2004年度より発足して以来、大学と地域とのネットワークを構築し、社会貢献活動の拠点としての役割を果たしてきた。特に、現代GPに採択⁷されたことにより、大学と地域との連携プログラムの一層の体制化を図っている。以下においては、特に、学生ボランティアへの理解を高めるための段階的な学習環境の整備、及びネットワーク化の特徴を捉えたい。

R大学ボランティアセンターの資料及びHP⁸によれば、ボランティア教育は3段階の体系化を目標としているようである。第1段階は、地域ボランティア活動の参加へと動機付けていくこと。第2段階は、学生がボランティア活動を通じて、地域社会の一員としての自覚と能力を育成し、専門知識の応用的な理解を促進すること、第3段階は、学生の情報発信能力を養うこと、である。これらを、正課授業及び課外活動支援という両面において充実を図っている。

具体的には、同資料によれば表1のように、第1段階では、大学の教養特殊講座として「地域参加活動入門」(2単位)を開設して、ボランティア活動の基礎を培うことを目標としている。第2段階では、「地域活性化ボランティア」(2単位)を設置し、学生自身が地域に貢献し、地域で学ぶ実践的活動を実施していることを目標としている(表2のA)。この講座は、図2にみるように、事前・事中・事後のボランティア学習プロセス⁹を辿る一連のプログラムに学生が参加することで単位取得が可能となっている。ボランティア活動のメニューは、表2のように、大学との協定を締結した多様なプログラムが準備され、学生が選択した活動に加わることとなる。このボランティアプログラムは、まさに地域と大学とが連携した学習プログラムであり、地域の課題を組織的に解決する方向を探る画期的なメニューといえよう。第3段階では、「ボランティア・コーディネーター養成プログラム」を市社会福祉協議会との学術協定により、R大学の10単位の正課科目が準備されている。夏季期間中は、「ボランティアインターシップ」も実施され、地域の資源をコーディネートできる力量の育成を目標としている。本養成プログラムは、1999年～2004年までに総計367人(学生172人、社会人195人)の受講修了者がいるようである。社会人は、児童施設職員、福祉施設職員、社会福祉協議会職員、ボランティアグループのリーダー、NPOスタッフ、看護師など多彩な顔ぶれとなる。同時に学生自身も含め異業種交流の場となり、活気付いているようである。この学習プログラムは、筆者らの「世代間交流」研究の点からも興味

深い。しかし、資格講座修了後の活躍の場の確保やフォローアップには目を向けていない。

1-3. F大学ボランティアセンターの事例

続いて、F大学ボランティアセンターにおけるボランティアの環境整備として、大学の基礎教養科目として位置づけられている学習プログラムについておさえておきたい。履修の流れについては、図2(F大学)に示したとおり、「情報収集・相談」⇒「計画」⇒「ボランティア活動の実施」⇒「報告」の学習プロセスを学生が主体的に行い、履修のバックアップをF大学ボランティアセンターと教務課が担う。4年間の学生期間中には、表1に示すように、「ボランティア活動1, 2, 3」科目の重複履修は認められているが、上限8単位までとされている。また、1学期以上継続するボランティア活動については、活動時間を通算して蓄積することができる。但し、学内のボランティア活動やサークル活動及び単発イベント型ボランティアは、履修登録の対象とはしていない。

こうした、学生が主体的に取り組んだボランティア活動の時間数を、単位として評価する試みは、筆者らの大学においても参考になる事例といえよう。

2. ボランティア国際年の目的からみた地域密着大学ボランティアセンターの活性化要素

以上から、ボランティア国際年の目的に従って、社会や地域ニーズに即した地域密着型大学ボランティアセンターの活性化要素を引き出していきたい。

第1に、ボランティアの環境については、①大学ボランティアセンターの開設、②ボランティアマネジメントに優れた教員及びスタッフを配置、③ボランティアセンターに関わる一定予算の配分、が整備されていることが不可欠といえる。

第2に、ボランティアのネットワーク化については、地域活動組織と大学のボランティアセンターが締結して、地域との連携事業を増やしていくことで、強固なネットワーク化を図っていくこと。このことにより、地域に大学が社会貢献する形式を構築することとなる。

第3に、ボランティアの理解を高めるために、地域に密着した学生に相応しいボランティア学習のメニューを多様に準備していること。また、ボランティア関連の資格については、学生のみならず、地域住民にも学習機会を提供することで、大学が社会や地域ニーズを充足している。尚、R大学及びF大学のボランティア学習は、図2のボランティアマネジメントモデルに近似したプロセスを体系化し、履

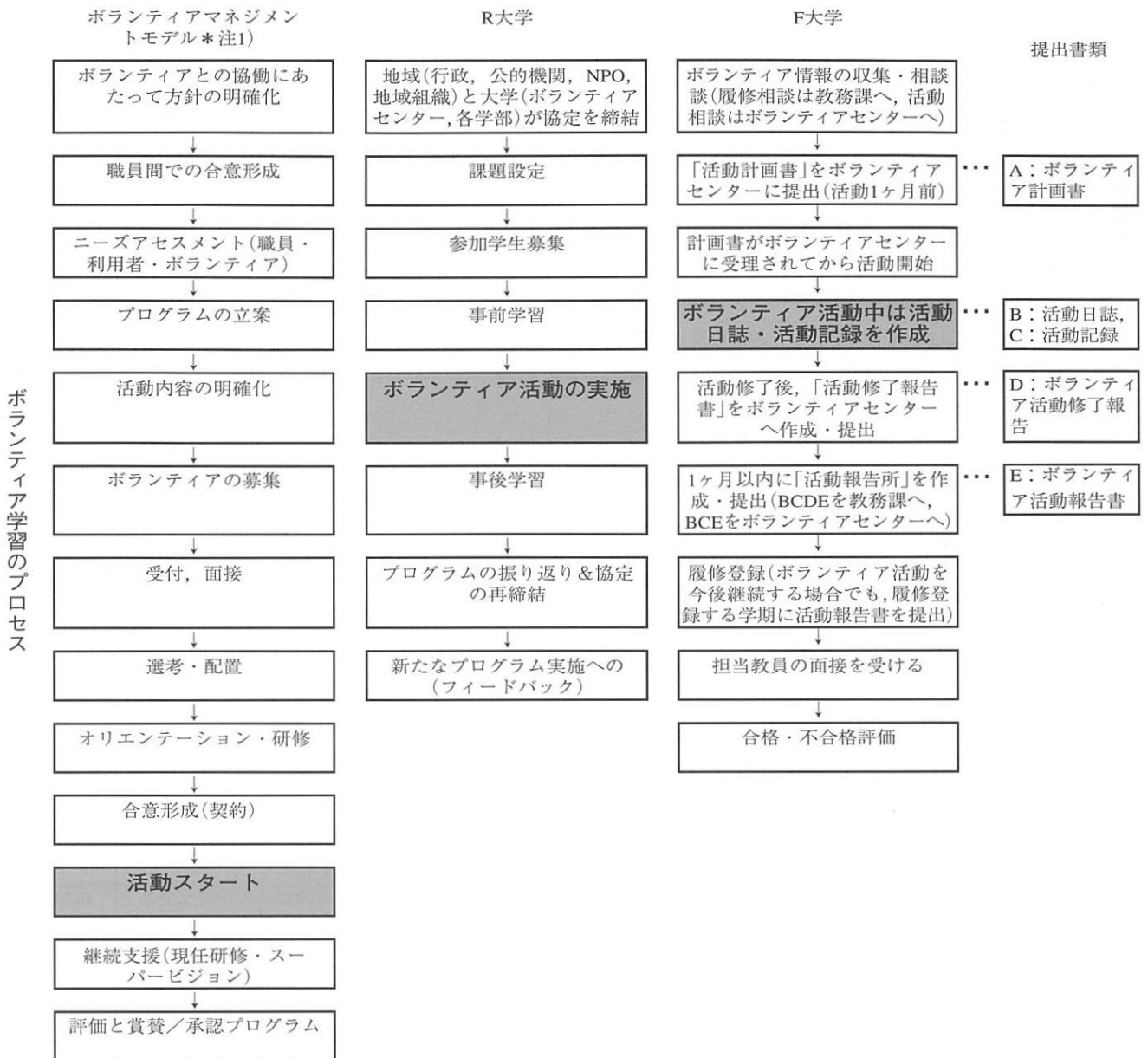


図2 大学ボランティアセンターにおけるボランティア学習のマネジメント

注1: 資料として, 次の3点の図表を組み合わせた比較図を著者らが作成。①「ボランティアマネジメントモデル」は, 岡本榮一, 菅井直也, 妻鹿ふみ子(2006)『学生のためのボランティア論』社会福祉法人大阪ボランティア協会, p.146, ②R大学「現代GP地域活性化ボランティア教育の深化と発展」p.7, ③F大学ボランティアセンターの内部資料。

注2: 灰色部分はボランティア活動を実施している部分を指す。

修指導を行っている。

第4に, ボランティアの評価と促進については, 図2にみるように学生のボランティア活動を事前・事中・事後の一連の学習として体系化することによって単位取組を可能にしていること。また, 学習を修了した学生を大学のボランティアスタッフとして位置づけ, 他の学生への支援活動を意図的に行い, 学生のボランティアの循環を図っていること。さらには, 大学のキャンパス内で, 学生のみならず地

域住民の方々も, 「レクリエーション・インストラクター」や「ボランティア・コーディネーター」など資格取得のための学習が準備されていること。つまり, 学習の成果を資格付与することでボランティアの評価を体制化しているといえるであろう。

以上の大学の活性化要因から, 筆者らの大学における「体験活動」の政策的な枠組みの構築へ示唆を与えてくれるものがあつた。

表2 R大学における「地域活性化ボランティア」プログラム一覧

	プログラム名(活動内容・場)	活動期間	募集人数	必要経費	事前学習	受け入れからのコメント
2006年度	都市と農村の共生「里山保全と農山村からの情報発信プログラム」	2回にわけて計5日間	15名	宿泊3000円, 交通費(バス代)2000円, 食事自己負担	9月 :90 分×3 コマ	NPO法人里山ねっと・あやべ
	都市と農村の共生「笹葺き古民家再生プログラム」	笹刈(1泊2日), 笹葺き(1泊2日)	20名	1回につき: 交通費1000円, 宿泊費2000円, 食費2000円		NPO法人美しいふるさとを創る会
	障害のある子どもたちと放課後活動支援プログラム	7~8月: 2回, 8~12月: 日中, 放課後	5~8名	交通費・昼食代		京都市立西総合養護学校
	環境保全と伝統文化: 百人一首のふるさと小倉復活プログラム	9~12月: 計40時間	20名	現地までの往復交通費, 飲み物, 弁当代は各自		NPO法人教育文化芸術振興協会
	「こどものまち」サポートプログラム	7~11月: 企画会議, プログラム開催, その他	20名	現地までの往復交通費		T市青少年センター
2005年度	復興農業ボランティア活動	1日間	—	—	京都市農林水産部, 舞鶴市経済部農林課他	
	里山ボランティア活動	3日間	—	—	里山ねっと・あやべ	
	むらおこし笹刈りボランティア活動	2日間	—	—	NPO法人美しいふるさと創る会	
	子育て支援ボランティアプロジェクト	4ヶ月	—	—	子育て支援ネット・あいあい	
	文化ボランティアプロジェクト	3ヶ月	—	—	NPO法人京都歴史回廊協議会	
	滝又滝再生プロジェクト	1日間	—	—	NPO法人森守協力隊	
	学生チャレンジショッププロジェクト	4ヶ月	—	—	主催: 近畿労働金庫, 実施主体にエイブルアート近畿2006実行委員会	

注1: R大学「2006年度『地域活性化ボランティア』受講ガイド」より著者らが作成。

注2: プログラムの詳細としては, 次の14点が示されている。①プログラム名, ②活動場所, ③アクセス, ④活動期間, ⑤事前学習II, ⑥募集人数, ⑦活動内容, ⑧期待できる学び, ⑨受け入れ団体, ⑩受け入れ団体からのコメント, ⑪参加者の声, ⑫必要経費, ⑬備考に服装等。

注3: 地域活性化プログラムのボランティア活動を合計40時間以上行っていることが原則。

3. 学習段階に応じたボランティア学習プログラムの試案

今日, ボランティアサポートセンターを始め, 各種機関ではオリジナルのボランティア学習プログラムが提供されている。前述した大学ボランティアセンターでも各担当教員に任されて学習プログラムが提供されている。しかし, ややもすると, ボランティア学習機関によっては, 「体験活動」をすることに主眼が置かれ, 年齢別, 性別にあった活動のプロセスを重視した学習プログラムを提供しているとはいえない場合もある。さらには, ボランティアの分野も, 福祉関連に限定されるなど, 領域を狭めているケースも散見される。

そこで, 本節では, 学習段階に応じたボランティア学習プログラムの試案の作成を行い, 今後のボランティア学習の開発における手がかりを得ることとしたい。

ところで, 学習プログラムには, 短期・中期・長期の事業計画がある。国立教育政策研究所社会教育実践研究セン

ター(2001)によれば, 学習プログラムに必要な項目として, 「事業の目的」, 「実施主体」, 「参加対象・定員(学習対象者別)」, 「学習期間」, 「学習時間(回数)」, 「学習の場所」, 「学習目標」, 「学習のテーマ」, 「学習内容」, 「学習形態」などが挙げられている。こうした項目に配慮し, ボランティア学習プログラムの一試案を作成してみたい。尚, 本プログラムを実施する場合の前提として, 「実施主体」は大学, 「参加対象」は学生及び市民, 「学習の場所」は学内キャンパス, としておきたい。

筆者らの試案した学習プログラムは, 表3のように, 【初級編】・【中級編】・【上級編】の三つの段階をもつ。ボランティア学習には多様なプログラムが発表, 報告されているが, ここで筆者らが最も重視している「学習目標」は次の3点である。第1に, 「自分の潜在能力」を掘り起こし, 学生自身の自己認識を高めること, 第2に, 他者との関係性, 社会との関係性を構築していく中で, 自分の位置を見出すこと, 第3に, 体験から気づきや揺らぎがおこり, 援助者

としての認識を高め、自己の人間としての可能性を発見することである。その上で、【初級編】で援助のための自己覚知、【中級編】で実践者としてのスキル、【上級編】で活動展開の方法の獲得、について段階をおって「学習テーマ」を高めることとする。

以上、ボランティア学習プログラムの一試案を作成したに過ぎない。今後は、ボランティア学習のための教科書及び報告書を可能な限り収集し、参考にしながら、「学習期間」、「学習時間(回数)」、「学習形態」等の手順の詳細なボランティア学習の展開方法を継続的に開発していきたい。

表3 ボランティア学習プログラムの一試案

【初級編】学習テーマ：援助のための自己覚知

	学習内容
第1段階：	自分とはどういう人間なのか？自己との向き合い
第2段階：	他者との関係性とは何か？他者との向き合い
第3段階：	コミュニケーショントレーニング(傾聴・共感性、発問の仕方等)、マナートレーニング
第4段階：	異世代間の交流を通じた体験型実践
第5段階：	自分の「気づき」を覚醒するためのボランティア学習

【中級編】学習テーマ：実践者としてのスキル

	学習内容
第1段階：	「ボランティアとは何か」という本質的な見直し、歴史的言葉の意味と考え方
第2段階：	具体的なボランティア活動へのかかわり方に関する認識の育成
第3段階：	ボランティアを「企画立案」「記録」「評価」をしていく力の育成
第4段階：	他のボランティア活動に学ぶ。スキルアップのための事例研究
第5段階：	仲間同士に対するピア・スーパービジョン ¹⁰ の方法論の学習

【上級編】学習テーマ：活動展開の方法

	学習内容
第1段階：	自分の活動の位置を客観視し、報告するボランティア活動を活性化する情報収集と具体的な運用能力スキルの育成
第2段階：	自分の活動領域と関係する個人・団体を結ぶネットワークスキルの育成(ボランティアコーディネーターを体験)
第3段階：	活動を援助者する人、活動を支援する人のコーディネートスキルの育成、社会的資源の発展方法を考える
第5段階：	スーパービジョンスキルの育成(自分が講師になったつもりで、事例に対してスーパービジョンを体験)

まとめ及び今後の課題

2000年12月5日の世界ボランティアデーを皮切りに、世界中で始動されたボランティア国際年の開会式で、国連事務総長のコフィー・アナン氏は次のように述べた。「社会はボランティア活動の価値を認め、促進する必要がある。社会はボランティアの活動を容易にし、自国そして諸外国でのボランティア活動を奨励しなければならない」。

ボランティア国際年から6年が経過した今、国際年の4つの目的に照らして、日本におけるボランティア学習を再検討する必要がある。本稿は、地域に密着した先進的な大学ボランティアセンターの活性化要素を国際年の目的に照らして、「体験活動」の政策的枠組みを検討した。また、標準的なボランティア学習プログラムの作成を試みたが、プログラムを用いた実証的な研究は課題として残された。

今後の作業は、年齢や性別に応じた効果的で多様なボランティア学習プログラムの開発と、高等教育機関を拠点としたボランティアの実践と評価測定を試みることである。また、実践現場においては、学内における体系的な体験活動カリキュラムの策定及び、学生の組織的なボランティア養成を、欧米のサービス・ラーニングやコミュニティ・サービス・ラーニング研究から学び、ボランティアに教育的機能と意味をもらす方向を探っていくことである。

尚、本稿は、2006年11月26日の「第12回福祉教育・ボランティア学習学会」で神谷・齊藤が発表した内容を発展させた内容となっている。

本研究は、本学生涯学習研究所における文部科学省の補助事業・私立大学高度化推進事業・学術フロンティア推進事業「生涯学習の観点に立った『少子・高齢社会の活性化』に関する総合的な研究」(研究代表：福留強)の一環として、大学と地域の協働による生涯学習システムの構築を研究したものである。

注

- 1 ボランティアセンターの評価項目は、次の10点を設定した。担当部署及び担当者(コーディネーター<専任・非常勤、外部委託、学生>、スーパーバイザー<大学教員>)、②コーディネーター(斡旋、相談、マニュアル化・手順)、③情報(掲示、ニュースペーパー、ネット)、④施設・設備、予算(フロア・コピー)、⑤学習(必修、選択、専門、単発・定期)、⑥評価(授業単位として認めているか、その他)、⑦リスクマネジメントの対処方法(ボランティア保険の導入)、⑧ネットワーク(企業、行政、NPO、他のボランティア団体との連携等)、⑨活動範囲(地域性・国際性)、⑩その他(特別な活動、イベント、大学開放等)
- 2 筆者らは、それぞれボランティア関連科目を担当するものである。神谷は「グループワーク論」「野外活動論」「ボランティア活動論」「子どもの活動の援助」、齊藤は「ボランティア論」「NPO概論」「NPO活動論」等を担当している。
- 3 体験活動の特色としては、①学習(自分)中心の学習、②身体とすべての感覚を用いる学習、③学び方を学ぶ学習、④

頭でわかることと行動がかわることをつなぐ学習, ⑤自分と他者とのかかわりを通じて学ぶ学習, がある。また, その効果として, 主体性, 現実性, 協働性, 創造性, 試行性が期待されている(廣瀬, 澤田, 林, 小野2000:11)。

- 4 筆者らは, 専任スタッフを置く大学ボランティアセンターを選定し, 2006年7月~12月に各大学を訪問した。別報では, 高等教育機関におけるボランティアセンターの体制を4つのタイプ(A. 地域に密着した大学, B. 国際的視野に基づいた大学, C. 宗教的使命に基づいた大学, D. 教育課程の中に活動が位置づいた大学)に分類し, 各大学における特色ある活動の考察を行った。
- 5 S大学の「地域交流センター」は, 資料によって機能が異なっているものの, 大枠, 次の5つの運営機能をもつ。すなわち, ①情報提供部門(=広報啓発部門), ②相談助言部門, ③活動プログラム開発部門(=人材養成/研修部門), ④災害時対応氏縁, ⑤調査研究部門, である。
- 6 海沿いにあるS大学の地域では, 漁業関係者が多いため, 子どもと大人との時間帯が異なり, 子どもの遊びの不足が課題となっていた。
- 7 文部科学省補助事業の現代的教育ニーズ取組支援プログラム「地域活性化ボランティア教育の深化と発展」プロジェクト(2005年~2008年度)
- 8 詳細は, <http://www.ritsumei.ac.jp/acd/cg/ss/vc/index.html>を参照。
- 9 「事前学習Ⅰ」⇒「事前学習Ⅱ」⇒「ボランティア活動の実施(40時間以上)」⇒「事後学習」⇒「レポート提出」
- 10 スーパービジョン(supervision)とは, 監督指導, 査察指導などの訳である。その機能には, ①支持的機能, ②教育的機能, ③評価的機能, ④管理的機能があり, 実施形態は1対1, 集団, 同僚同士などで行われる。これまでは, 社会福祉施設や機関などにおいて実践されてきた(日本社会福祉実践倫理学会1996:120, 社会福祉法人大阪ボランティア協会2004:153)。
一方, ピア・スーパービジョンとは, スーパーバイザー同士がお互いに仲間としてスーパービジョンを展開する形態である。ピア・スーパービジョンは, 全員がスーパーバイザーであり, 同時にスーパーバイザーとなる。参加者同士がお互いに, 教育的機能, 支持的機能でもっと成長しあ

うことをめざす方法である(塩村2000:130-132, 黒田・山辺・倉石2002:195, 北川・相澤・久保2006:16-17)。

<引用文献>

- 廣瀬隆人, 澤田実, 林義樹, 小野三津子(2000)『参加型学習の進め方』ぎょうせい。
- 神谷明宏・齊藤ゆか(2006)「高等教育におけるボランティア学習プログラムづくり」『日本福祉教育・ボランティア学習学会発表要旨・論文集』pp.119-120。
- 北川清一, 相澤譲治, 久保美紀(2006)『スーパービジョンの方法』相川書房。
- 国立教育政策研究所社会教育実践研究センター2001『平成13年度 学習プログラム立案の技術』。
- 黒木保博, 山辺朗子, 倉石哲也(2002)『ソーシャルワーク』中央法規。
- 日本社会福祉実践倫理学会(1996)社会福祉基本用語辞典』川島書店。
- 岡本榮一, 菅井直也, 妻鹿ふみ子(2006)『学生のためのボランティア論』社会福祉法人大阪ボランティア協会。
- 齊藤ゆか, 神谷明宏(2006)「高等教育におけるボランティアサポート体制の評価と支援方策」『聖徳大学人文学部研究紀要』17号, pp.55-62。
- 齊藤ゆか(2006)『「学社融合」社会における高等教育の役割(その1)―学生と地域を結ぶ意義―』『聖徳の教え育む技法』第一号, pp.51-60。
- 齊藤ゆか, 伊藤セツ(2002)『「ボランティア国際年」に関する国内外の動向と国際的見解―ボランティアの方向と展開のために―』『昭和女子大学大学院生活機構研究科紀要』Vo.11, pp.1-17。
- 塩村公子(2000)『ソーシャルワーク・スーパービジョンの諸相』中央法規出版。
- 社会福祉法人日本青年奉仕協会(1998)『2001年国際ボランティア年ハンドブック』JIVAブックレットNo.12。
- 社会福祉法人大阪ボランティア協会(2004)『ボランティア・NPO用語事典』中央法規。

(2007年1月10日受理)